

## 2

## 池田瑞仙と『唇舌帖』の考察

西巻 明彦

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部／日本歯科大学医の博物館

池田瑞仙は周防岩国の出身で、安芸宮島、大坂、京で開業の後、寛政9年に江戸に出、江戸医学館で痘科教授に就任した。富士川游によれば「世々痘科を業とす。曾祖正直（高山と号す）明人戴曼公に従て痘科の秘訣を受け、図説を作て家に蔵し、子孫専て法となす。瑞仙幼にして弧となり、叔父某のために教育せらる。長ずるに及びて医を修め、和蘭外科を以て行わる。而して家学を興すにあり。岩国の地、痘瘡稀にして術を試むるに足らざるを以て、移て安芸の宮島に居る。會々宮島痘瘡流行甚し。図説に依りて治をなし、甚だ効驗あり。」と述べ、さらに「古今の痘書を取てえを秘訣に参し、精勵元年その學術と共に熟す。」と記している。瑞仙は一般に種痘を否定したことから頑迷な漢方医とみられがちであるが、オランダ外科を業にしたという記述は興味深い。

『唇舌帖』または『戴曼公唇舌図訣』は池田流痘疹治療の秘伝書で、18唇36舌死舌5を立体的に着色した口唇や舌図を制作したものである。紀伊弱斎の『池田先生痘瘡治術伝』には診断の中で舌診の優位性を述べている。この秘伝書は全国に流布し、現在でも各地で認められる。このような立体的、着色された唇舌図は、木骨につく日本医学の立体化への志向があると考えられ、瑞仙がオランダ外科を業としていたならば、蘭書からの影響があると推測することができる。

池田流痘疹治療は、戴曼公由来の家学と言われている。寛政9年正月、多紀永寿院から幕府宛の書類の中で「唐人伝来痘瘡科にて候、是は則独立禅師と申候唐僧に御座候、右流儀は一家の学にて大抵は口授口伝のみに御座候、乍去痘瘡の書処候処は取長捨短申候、依之痘瘡家の書物式捨四五家の書物中より撰取候間、一家立候流儀にては御座候、尤其内にて論は痘科鍵々重取、法は活幼心法を重に取申候事、右の趣にて痘科鍵を講書に為仕候哉」と述べており、祖を戴曼公にしているものの、それ以外の痘瘡に関する書物からも取り入れているが、その中でも理を『痘科鍵』、法を『活幼心法』を重視していることが判明する。さらに講書として『痘科鍵』を医学館で採用し、このことは甲斐の痘科同盟会の中でも使用している。つまり『痘科鍵』は、池田流痘疹治療の母体となっていることがわかる。

『痘科鍵』は朱巽による痘瘡治療で、日本においても享保15年に和刻されている。和刻書は上巻、下巻にわかれ、痘瘡治療の基本となる鍵の部分が記されている。池田流痘疹治療の四節八証について四節は『痘科鍵』上巻明治篇に、八証は審症篇に記述が存在している。また『痘科鍵』上巻総論には「此の八の者を明らかにせば、思ひ半ばに過ぎん。然りと雖寒熱虚実を弁すること、まさに舌を用いて綱領と作すべし。」と記され、診断の重要な点は舌診であることが述べられている。一般的に池田流痘疹治療の特徴として、四節八証、唇舌診が挙げられているが、必ずしも池田流痘疹治療独自のものではない。また池田瑞仙は『重校痘科弁要』の中で、「吾曼公先生其理を精窮及八舌八唇之妙訣を撰次」と述べていることから、戴曼公の唇舌診は八舌八唇であったのではないかと考えられる。『重校痘科弁要』の最後に丹波脇山は「先生嘗手製の唇舌頭面図を以て門人に授け」と記している事から、池田瑞仙が立体的な唇舌帖を自ら作製したと考えられる。

池田流痘疹治療は戴曼公由来の家伝と言われるが、口訣のためはっきりした部分は不明であり瑞仙は中国伝統医学由来の各種痘疹本を撰次していると述べている。『痘科鍵』を講読に使用したため痘瘡の概念に対し中心的な思想をしめしていると考える。『痘科鍵』は図が無く、池田瑞仙は唇舌診図及び顔面図を制作し、臨床上平易に解説したことが、池田流痘疹治療が普及した理由であると考えられる。